

「我家の戦争体験」

戦後 80 年、遠い歴史的感覚でしかない昭和 19 年生まれの私にとって、嫁ぎ先での母の苦労した話はしっかり聞いていました。

母はあの時代、太平洋戦争の真中を生きてきた。

（以下寄稿者の母の話）

昭和 19 年の主人の日記に「戦争がだんだん激しくなりつつある。自分も早く出征して、お国のために尽くしたい。家も命も国のために捧げたい」と書いてあった。

いつ召集が来るか分からない。母や子どものことを頼む、また「牛の使い方も教えておくよ」と色々教えてくれた。

昭和 19 年役場より来られ「おめでとうございます」と赤紙を渡された。5 日後には大竹海兵团へ入隊。白いサラシの布に赤い糸で真心込めて一針ずつ縫い込む腹巻をつくってあがる日数もないまま、海軍軍人として主人は出征した。

末の娘は誕生前でした。子どもを抱えて泣いている暇はない。国のために出征したのだ、負けてなるものかとどんなにつらい事も出征兵士の妻だと自分に言い聞かせた。

その年の 7 月呉海兵团へ面会に来るように通知がきた時のこと。4 人の子どもを連れてやっとの思いで着いて受付に行くと「面会は謝絶です」と言われ途方に暮れていると、将校らしい人の計らいで一時間だけ面会を許してくださった。

「もうあなたの夫ではない、国に捧げた体だから忘れて欲しい」と言って連れていかれた。何も話すことができなかつたのがとても残念だった。

そして終戦。

あちらこちらの方が戦地から帰ってこられた。私たちは今日こそ帰ってくると待ち続けた。子どもたちも学校から走って帰っては「お父ちゃんは？」と毎日聞かれ、夕方になると「今日もお父ちゃん帰らんかったのー」と遠い空を眺めながら話す子どもの姿が身を切るほどつらかった。

その 3 年後、公報が届いた。

「お骨を受け取ってください」

白木の小さな箱、半紙に氏名・フィリピンで戦死、とだけ書いてあった。

出征する前に頭髮と爪をとっておいたのが計らずもお骨の代わりになろうとは思っていなかった。

（母の話終わり）

先人たちの願いは平和な社会、受け継いでゆく大切な人を今を生きる私たち一人ひとりの責務と感じます。つらい思いをした母が語った一言一言、今も心に残っております。